

# 世界史教育はオリエンタリズムを再生産していないか

小川幸司（長野県松川高等学校教諭）

## 1. “素朴な分類学”としての高校世界史

歴史用語を暗記することに力点がおかれている日本の世界史教育は、“素朴な分類学”にとどまっている。ゆえに高校生の中東認識は、社会に流布されている「危険で不可解な」中東イメージを拭い去ることの出来ないまま、いたずらに詳細な用語のみを丸暗記している状態になっているといえよう。

その原因の一つとなっているのは、世界史教科書の内容である。たしかにほとんどの教科書には中東の研究者が関わっている。しかし、厳しい制限字数のなかの“分担執筆”を寄せ集めている教科書の性質から、研究者の専門性が“素人”である読者に対して意図せざる落とし穴を作ってしまうように思える。それは一つに、自明の事柄を語っているときの説明不足に起因する落とし穴であり、二つめに、世界史全体を鳥瞰して語る理論や比較が欠如しているゆえの落とし穴である。

## 2. 中東史記述の落とし穴①～イスラームを説明できていない

たとえば、多くの教科書では、イスラームの考える神について、「唯一神（アッラー）」と、素っ気なく記述するのみである。そこで世界史教育の“素朴な分類学”は、教師も生徒も、「ユダヤ教はヤハウェで、キリスト教はイエスで、イスラームはアッラーで…」という思考回路のなかでこれをとらえようとする。アッラーが神そのものをあらわす単語だということを理解させる記述になっていない。この説明不足は、決定的であろう。さらに言えば、キリスト教の神概念が三位一体のペルソナをとまなうことが、鳥瞰する視点から比較して語られるべきであろう。

さらに、こんなこともある。近代合理主義の価値観をもつ生徒にとって見れば、「啓示」というものがにわかになら得ない現象であることは当たり前である。イエスが伝道の生涯にとどまっているのに対し、ムハンマドの場合が布教と国家建設の生涯であったことが、イスラームの“非合理性＝狂信性”を印象づける結果となってしまっている。ムハンマドが、最初から唯一神を奉じる国家建設を目指し、それが実現していったかのように、歴史をみてしまっているのである。イスラームの教義が本来もっている“普遍的性格”と、“試行錯誤の結果”としての教団国家の発展が区別されていないのである。さらには、中東世界のみ、近現代にいたっても“地域”というより“イスラーム”という枠組みが強調されることによって、さも「文明の衝突」が必然的に思えてしまうような結果になっているのである。

イスラームそのものに内在する理解しにくさ、という側面もあろう。人間が平等であると考え、偶像崇拝を否定しながら唯一神に向かい合うということは、きわめて個人主義的な宗教のありかたであるように思える。しかしその一方で、五行などの他宗教よりもはるかに目立つ集団主義的な姿をみると、高校生のイスラーム像は混乱するのである。偶像崇拝を排した神は、しかし『コーラン』で怒り喜ぶ感情をあらわにしており、ムスリムのなかに人格的なイメージ（像）は形成されないのか、その根本的なところもわからない。以前、私は「トリック・スター」という表現に感心したこともあったが、世界史教育には使えないように思う。私たちの日常とは明らかに異質な思考について、より丁寧な記述が必要である。そのほうが、煩瑣な王朝を羅列するよりもはるかに大切なことであると私は考える。

## 3. 中東史記述の落とし穴②～“国民国家病”を意識していない

きわめつけは、普遍的理念をかかげながら、宗派が分裂・抗争し、諸王朝が細かく分立する歴史の展開を覚えさせられると、高校生は「混乱するイスラーム世界」ともいうべきイメージを決定的にしてしまう。鳥瞰する視点からの記述がないために、生徒は完全に“国民国家病”にかかりながら歴史

をみてしまっているのである。イギリスやフランスやドイツなどは、どんなに王朝が興亡しようと、民族の交錯があろうと、現在の“国民国家の枠組み”（各国史で！）でとらえ、そこには“発展”の印象がともなっている。しかし、遊牧民国家や、イスラーム諸王朝が、国家構造の問題としてヨーロッパとは根本的に異なっているという説明が欠如しているから、イスラーム世界を“国民国家の枠組み”でとらえられない混乱した世界だと認識してしまうわけである。これに帝国主義批判が不十分なまま、混乱する 20 世紀の中東認識が接木されていくわけだから、世界史を一生懸命学ばば学ぶほど、オリエンタリズムが再生産されるという事態が起こるのである。

#### **4. 提言**

たしかに、イスラーム文化の丁寧な記述や、ネットワーク論を導入したイスラーム世界の経済的役割などについての記述は、近年の高校世界史にとって、大きな改善点であった。しかし、それらは、オリエンタリズムの再生産への十分な解毒剤とはなりえないであろう。

私は、日本の世界史教科書のイスラーム世界に関して、以下のような記述の改善が必要であると考え。それらは、歴史を論ずる私たちの“語り口”の変革に関わる問題である。

①“素人”がもつイメージに配慮したきめ細かな叙述をすべきである。そのために煩瑣な知識が割愛されることは構わないのではないか。②世界史を鳥瞰する比較史の説明を随所におこなうことで、イスラームの宗教や社会の個性を浮かび上がらせるべきである。③「イスラーム世界」という一元的なとらえかたをするのではなく、イスラームを基礎にしながらもそれぞれの個性を展開させてくる「地域世界」という枠組みをきちんと叙述すべきである。

高校教師の側にも提言したい。私はかねてから、後期中等教育の歴史教育は、歴史を素材にして人間のありかたや政治のありかたを考察する「歴史批評」を、教師と生徒がともに目指すべきであると論じてきた。例えば、イスラームの理念を学んだのならば、それが今の自分や世界にとってどのような意味をもつのかを、考察・批評すべきなのである。その知的営為が教室でなされることが、暗記に随した歴史教育を刷新する道であろう。「歴史批評」のためには、教師の“語り口”が根本的に変わらねばならない。たとえば、「歴史学の代表は、イブン・ハルドゥーンだ」という“分類学”風の説教をやめ、「イブン・ハルドゥーン政治分析には、現代の大衆民主主義にも通用するものがあると僕は考える」というような教師における歴史との対話が表現されなければならない。

そのためには、私は『コーラン』やイブン・バットゥータやイブン・ハルドゥーンや『千夜一夜物語』を教室で生徒と一緒に読んできた。しかし、教えることを自分で確かめ、対象と対話することが、日本の高校教師には決定的に足りないのではあるまいか。

いかがであろうか。